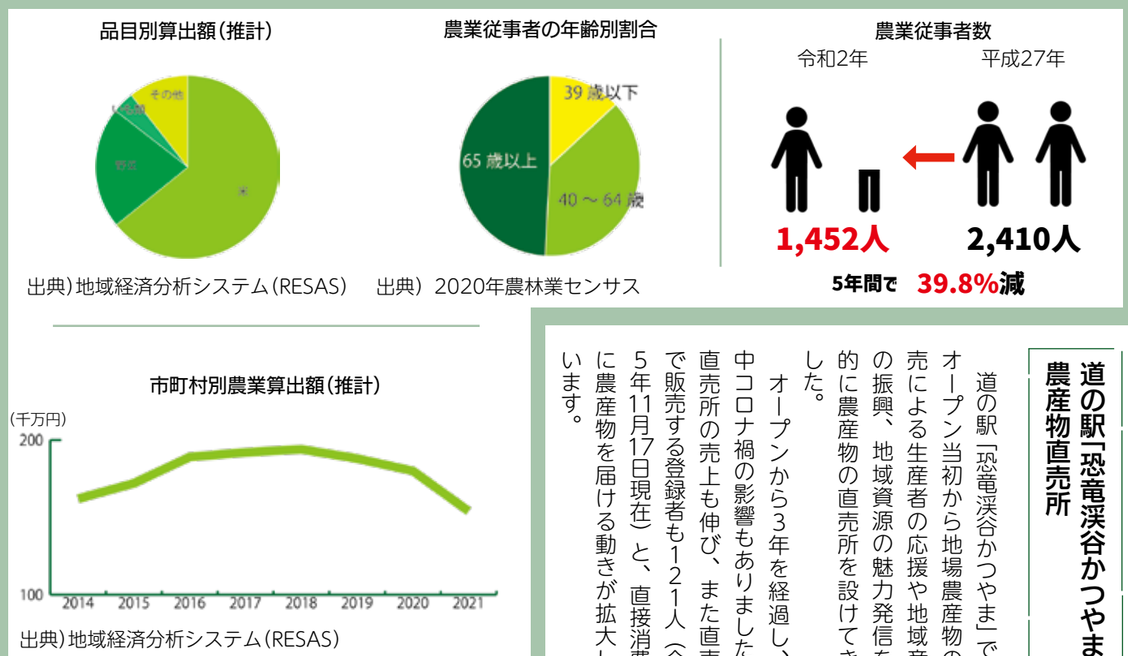
1 農業のいま



出典）地域経済分析システム（RESAS）

出典）2020年農林業センサス

出典）地域経済分析システム（RESAS）

道の駅「恐竜渓谷かつやま」農産物直売所

道の駅「恐竜渓谷かつやま」では、オープン当初から地場農産物の販売による生産者の応援や地域産業の振興、地域資源の魅力発信を目的に農産物の直売所を設けてきました。

オープンから3年を経過し、途中コロナ禍の影響もありましたが、直売所の売上も伸び、また直売所で販売する登録者も121人（令和5年11月17日現在）と、直接消費者に農産物を届ける動きが拡大しています。

農業を取り巻く状況

一方、農業を取り巻く環境は、年々厳しさを増しています。

特に気候変動に起因した猛暑や大雨などの自然災害、生産者の減少・高齢化など様々な課題に直面しています。

勝山市の農業従事者は平成27年から令和2年の5年間で約40％も減少し、そのうち約50％が65歳以上の高齢者です。また、この間の耕地面積も約13％減少しています。

また品目別算出額によると、米が約60％、野菜が約20％となっており、勝山市の農業の中心は米となっています。そのため市全体の農業産出額が米の生産量と価格に大きく影響を受けており、平成30年以降農業算出額が減少しています。

様々な課題がある中で、特に大きな課題となっているのが農業従事者の「高齢化」「担い手不足」そして「耕作放棄地の増加」です。

2 これからの農業

農地の集積・集約化

勝山市の農業が抱える「高齢化」「担い手不足」そして「耕作放棄地の増加」といった課題は、日本の農業全体が抱える課題でもあり、長い間指摘され続け、様々な政策を行ってきたにもかかわらず未だ改善が見られません。

農家の「高齢化」や「担い手不足」問題が慢性化するなか、農地の集積・集約化による効率的で安定的な農業経営を目指す必要があります。勝山市においても、個人の農業者は減少していますが、団体や法人は増加しています。今後、農地中間管理機構などを活用したさらなる農地の集積・集約化を促進する必要があります。

スマート農業の推進

少ない農業者で効率よく作業をするためには、ICT技術や農業用ロボットなどを活用したスマート農業を推進することも必要になってきます。

市内でも、ドローンによる肥料散布やトラクターや田植え機などの自動走行農機を活用して、農作業の大幅な省力化に挑戦している事例があります。また施設園芸では温度や湿度などを管理し、作物の成育を調節する環境制御システムを導入している事例もあります。

次世代の担い手

農業がおかれた厳しい環境の中においても、若手農業者が集まり新しい取り組みを始めようとしています。令和3年に農業のイメージアップに向け立ち上がった「勝山農業男子・農業女子応援プロジェクト」。プロジェクトに参加したメンバーがこれまでの活動から更に幅を広げようと新しい団体を立ち上げました。次ページからは、次世代の農業を担う若手農業者を紹介します。